

# 農村女性のエンパワーメントとジェンダー構造の変容

—— パラグアイ生活改善プロジェクトの評価事例より ——

藤 掛 洋 子

開発実践や「開発とジェンダー」論において、女性のエンパワーメントの重要性が議論されて久しい。一方、エンパワーメント概念への批判も多様に出されている。

本論では、生活改善プロジェクトに関わったパラグアイS村の農村女性を事例に導きだしたエンパワーメント評価モデル：成果三類型（藤掛モデル、藤掛2001）を用い、2001-06年までに得られたデータを加えることから、対象地域の人々によってエンパワーメントと考えられている意識や行動変容を可視化するとともに、モデルの精緻化を行うことを目的とする。また、対象社会のジェンダーの関係性の変容について、男性や社会構造も包含しつつ分析する。

生活改善プロジェクトを主体的に展開してきた農村女性たちのエンパワーメントのプロセスは、女性たちの位置するミクロな世界である世帯内外のみならず、村落内外における社会関係にも変化の萌芽をもたらした。エンパワーメントを批判する主流の議論は、エンパワーをさせる側の語りであり、言説であるという指摘は考慮に値するが、女性たちが位置する社会は、「外部」から隔絶され孤立したものではない。つまり、女性たちは常に外部との相互作用が生じる「場」に生きているのであり、女性たちの意識も場も動的なものである。エンパワーメントをさせる側とされる側という二項対立的な視点では、対象社会で生起する事象を分析することは困難である。多様な人々との関わりの中で生成される人々の意識や行動、そしてエンパワーメントのプロセスを時間や空間という軸も織り交ぜて検証することが求められる。質的な側面の変化であるエンパワーメントのプロセスを可視化することは容易ではないが、そのための枠組みの一つとして本モデルが活用できると考える。

キーワード：農村女性、エンパワーメント、ジェンダー構造、社会変容、質的评价

## はじめに

エンパワーメント (Empowerment)<sup>(1)</sup> は、人権運動、フェミニズム運動、女性学、教育学、開発<sup>(2)</sup>学、国際協力、「ジェンダーと開発」論<sup>(3)</sup>、社会福祉、ビジネス、保健医療、コミュニティ心理学、マクロ・カウンセリングなど、幅広い分野で用いられている概念である。国際協力の文脈における女性のエンパワーメントは、1995年に北京で開催された第4回世界女性会議以降主流の議論となり<sup>(4)</sup>、その後も国連女性の地位委員会などで毎年、様々な観点から議論されている。例えば、2008年に開催された第52回国連女性の地位委員会では、「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための資金調達」が議論の中心となった。

女性のエンパワーメントを考える場合、女性の社会における位置付けとその位置付けを規定する権力の関係を抜きに語ることはできない。女性は、宗教や経済、社会階層、人種、年齢、性、ジェンダー、言説などにより社会の中に位置付けられているが、そこには常に不均衡な力関係が存在するからである (スコット 1992)。女性のエンパワーメントのプロセスを明らかにするには、女性の従属をもたらす多様なレベルの社会構造を考察すると同時に、当事者である女性が創造する新しい規範や言説、社会についても考察する必要がある。

本稿の目的は、パラグアイ共和国 (以下、パラグアイ) S村の農村女性が主体的に展開した「生活改善プロジェクト」を1993年～2006年まで調査することを通し、対象地域の人々が、プロジェクトをどのように自身の置かれる文脈に取り込み、当初の目的を書き換え、自己のエンパワーメントにつなげていったのか、また、対象地域のジェンダー構造にどのような変化をもたらしたのか、筆者が藤掛 (2001) で提示したエンパワーメント評価モデル:「成果三類型」(以下、藤掛モデル) を用い、2001-06年までのデータを加えた上で、S村の女性たちのエンパワーメントの可視化とモデルの精緻化を行うことにある<sup>(5)</sup>。

結論を先取りすると、女性たちの意識や行動は、宗教や言説、年齢、経済・社会階層、歴史、マチスモ (男性優位) 思想・マリアニスモ思想<sup>(6)</sup> などが複雑に交錯する中で規定されていることが示された。その一方、プロジェクトを主体的に実施した女性たちは、プロジェクトのみならず、村落内外における多様な情報を入手し、個々の文脈の中で自身の社会における位置付けを確認し、交渉を行い、状況の改善に向けた具体的な行動を起こしていた。女性 (たち) のエンパワーメントやそのプロセスを分析するには、女性たちを「女性」として構築してきた社会と、その社会における女性自身の自己を (再/脱) 構築していく、そのあり様や、諸個人の経験や世帯内外の男女、世代間、階層間などに見られるジェンダーの規範などを複眼的に考察することが必要である。これらの考察を通し、

対象地域の女性たち自身のエンパワメントの諸相は、開発支援者や研究者がこれまで作り出してきたエンパワメント像、すなわち一枚岩的なエンパワメントとは異なるものであることが明らかになった。

次章では、エンパワメント概念を再考し、2章において調査期間・手法・研究方法と留意点を述べる。3章では、パラグアイの概観と生活改善プロジェクト形成の背景、モデルが導きだされたプロセスを記す。4章では、農村女性のエンパワメントのプロセスを述べ、5章では、村落内外のジェンダー関係の変化の萌芽について述べる。

## 1 エンパワメント概念再考

エンパワメント概念が多様な学問分野や実践領域で用いられる一方、この概念への批判も多い。例えば、開発協力の文脈に焦点を当てると、エンパワメントとはエンパワーする側の語りである、エンパワーする側が、エンパワーされる人々をどのようにエンパワーしてやるかという管理された議論と政策を通して、エンパワーする側とされる側の上下関係が再生産される（内山田 1999, p.2）や、対象地域の人々をエンパワーしようとしている開発事業のファシリテーターがエンパワメントの信奉者である（青木 1999, p.16）などの指摘である。青木は、近代資本主義国家社会の価値観や近代的な道徳的善としてエンパワメント実践を行おうとする人に対し、異なる言語とハビタスによって織り成される生活について理解を求めていくことが重要である、と主張する（青木 1999, p.25）<sup>(7)</sup>。また、エンパワメントのプロジェクト化は、援助をする側が理想とする人々のあるべき姿を通文化的に対象社会に押し付けているのではないか（太田 2005, p.9）という指摘もある。

これらの主張は、対象社会の女性の置かれる立場が一枚岩で、開発事業に関わるファシリテーターも常に固定的なポジションにあり、かつ一枚岩的な価値観を持つ人々と仮定するならば<sup>(8)</sup>、また、対象社会において人々が開発支援者の働きかけを単に受動的に受け止めるのみの存在であるならば、ある意味正しいといえるかもしれない。しかし、対象社会の人々の置かれる（従属の）構造や個人の経験は多様である。また、個人の価値観も多様である。さらにそれらの価値観は多様な他者との交渉や時間の流れの中で変化する。当事者による能動的な働きかけに変化する可能性もある。

女性のエンパワメントには、既存の従属構造を転換させるような女性自身の自己認識と主体構築の過程が重要である。既存の社会にある女性の従属構造は、しばしば不均衡な権力関係から生じるものであるが、フーコーによると、人は言

説の中で構築されるが、しかし、言説の働きかけを単に受動的に受け入れるのではなく、人はエイジェントであり、抵抗は、言説=力の網の目の至るところにある（フーコー 1986, pp.123-124）。川嶋のフーコー分析によると、精神は、独立した思考力ではなく、言説/力によって書き込みが行われる場である。けれども、言説による書き込みは完全なものではなく、個人は主体（エージェント）として、それに抵抗する可能性を持つ存在である（川嶋 1999, p.5）。また、コンネルによると、個人生活のレベルと集合的・社会的条件のレベルは、根本のところでは融合的に関連しあっている（コンネル 1993, p.55）。このことから筆者は、個人の語りや実践をみていくことから、抵抗する個人と新たに創造される社会をみることができると考える。

対象社会の人々は、既存の社会の言説や外部者が持ち込む一方的なエンパワーメントの言説を受動的に受け入れるのみの存在ではないであろう。であるならば、自己を再/脱構築し続ける存在であり、自己の文脈の中でエンパワーメントをなし得る存在である女性たちを捉えていくことが重要であり、語りと実践をみることは不可欠であると考えられる。

## 2 調査期間・調査手法・研究方法と留意点

筆者は、1993年1月-1995年2月まで国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency 以下、JICA）<sup>(9)</sup> 青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers 以下、JOCV）事業によりパラグアイの農牧省（Ministerio de Agricultura y Ganadería, 以下MAG）農業普及局（Dirección de Extensión Agraria y Ganadería 以下、DEAG）に派遣され、生活改善普及員としてS村の近隣都市で農村女性の生活改善のためのプロジェクトを支援した。S村は対象村ではなかったが、S村の女性たち自身の筆者に対する働きかけにより、生活改善プロジェクトをS村で支援するに至った。また、支援終了後、1997年から2006年までの間に7回の現地調査を実施している<sup>(10)</sup>。

表1は、本稿の調査協力者、女性12名と女性たちを支援した男性1名の諸属性を示したものである。ここで示す調査協力者は、生活改善プロジェクト（3章参照）の全て、もしくは、いずれかに関わり、かつ筆者の調査で6回以上、継続してインタビューができた人々である<sup>(11)</sup>。なお、プロジェクトに参加していないS村や近隣農村、町の人々の「語り」や参与観察もフィールド調査で行っている。

本稿で扱う語りと実践の分析には留意点もある。筆者は、S村における開発実践者であり、調査者でもある。開発実践者であるがゆえに収集できたS村の女性

たちの語りや実践は多い。一方、S村の人々にとっては開発実践者である続ける筆者であるがゆえに語る内容にバイアスが生じることもある。例えばそれは、儀礼的な語りであったり、さらなる援助を獲得するための語りであったりもする。この点は長期に亘る調査を通じ、三角検証を行うなどの留意をはらい、分析上のバイアスが生じないようにつとめてきた。また、調査者である筆者自身も、文化、社会、歴史、ジェンダー、言説などにより構築され、筆者自身の価値が中立でない点もある。例えば、ジェンダー視点から農村社会を見つめる目である。そのため、女性たちの語りを選択するその行為、記述する行為もまた、価値中立的なものではない部分もあるだろう。しかし、これは箕浦（1999）のいうところの、焦点観察でもあり、研究をする上では必ず必要な視点である。留意点を踏まえつつ、S村の調査協力者の文脈に寄り添うことを念頭に、本稿では調査協力者の語りや実践を提示する。語りと実践という個人の日常実践の中に、個人と権力の関係やエンパワーメントのプロセスを読み取ることができると考えるからである。

表1 調査協力者諸属性（特に記載のない場合は2006年8月現在）

名前(仮名)	参加時期	性別	出生年	就学年数 (留年)	子どもの数	未婚婚等	職業 (1999年)	土地所有(ha)	名義
マリア	1993-2001	女性	1963	6年(1)	4	既婚	農業・主婦	知らない	夫の父
サラ	1993-2006	女性	1964	5年	6(別居1)	既婚	農業	3	夫
ビクトリア	1994-2006	女性	1962	4年(1)	5	既婚	畑仕事	6	夫
カシミラ	1994-1995	女性	1951	5年	8	既婚	主婦	6.5	夫
エレナ	1994-1995	女性	1978	6年	1	未婚	家政婦	売った	—
テレサ	1994-1997	女性	1966	5年	2	既婚	主婦	6	夫と私
ミルタ	1994-1995	女性	1971	6年	2	既婚	主婦	知らない	夫の父
グラシエラ	1994-1995	女性	1977	6年	2	未婚の母	農業	12	自分の父
カレン	1994-1995	女性	1963	6年	1	既婚	主婦	3	夫の父
プリミ	1994-1996	女性	1976	9年	1	未婚	夜間大学生	7.5	父
ルシー	1995-2006	女性	1969	5年	8(別居1)	内縁の妻	農業・主婦	20	内縁の夫の母
アナイ	1997-2001	女性	1960	6年	4	既婚	農業・主婦	知らない	夫
ベドロ (マリアの夫)	1993-2001	男性	1957	6年	4	既婚	農業	20	自分の父

出典：藤掛（2000）p.19 表3-2を基に藤掛のフィールドノート（2006）より加筆。

### 3 パラグアイ共和国とS村における生活改善プロジェクト

#### 3-1 パラグアイ共和国とS村の位置付け

1811年に宗主国スペインから独立した南米大陸中央南部に位置するパラグアイは、総人口601万人（一人当たりGNI 1,670ドル、世界銀行2007）の農業国である<sup>(12)</sup>。国民の97%が先住民族グアラニー人とスペイン人の混血のメスティーソである。

同国は、アルディーティが「停滞の神話」(mito paralizador)と表現するように、ストロエスネル(Alfredo・Stroessner)による共和国史上最長の独裁政権を1953年から1989年まで経験している。このような35年に及ぶ長期独裁政権は、人々の思想、言論、表現の自由を奪ってきた(Arditi 1989)。

1992年公布された新憲法は、信教の自由と政教の分離を定めている。しかし、国民の98%はカトリック教徒であり、宗教観が男女に対する保守的な価値観に大きな影響を与えている<sup>(13)</sup>。またラテンアメリカに特徴的なマチスモ思想やマリアニスモの思想が社会に存在し、特に農村部に根強く残っている。

筆者がJOCVとして活動していた1993-1995年頃のパラグアイ社会は以下の通りである。

同国の全農業地の84%は、20ha以下の小規模農家(小農)である(MAG 1991)<sup>(14)</sup>。1980年代まで、近代化政策のため小農は綿花栽培を中心に行っていた。しかし、1990年の綿花の国際価格の暴落と、1992年の旱魃は、農村の経済や人々の生活を疲弊させていった。1992年頃、MAGは1995年に関税同盟として発足したMERCOSUR(南米南部共同市場、以下メルコスール)に先駆けて、綿花栽培から野菜栽培への作付け転換政策を実施している。そのため、多くの農家が綿花から野菜栽培に作付け転換をしていった。

パラグアイは2ヶ国語を公用語(西語・グアラニー語)と定めている。そのため義務教育(6年から9年に移行)は、西語とグアラニー語の授業が併用して行われている。しかし、農村部の学校は降雨により休校になることが多く、また、農村部では日常生活においてグアラニー語を用いるため西語の会話や読み書きが十分にできない人々が多い(藤掛 2003)。

義務教育(この場合は6年間)修了率は都市部が84%であるのに対し、農村部は47%(男子53%、女子47%)である<sup>(15)</sup>。しかし、現実には農村部における女兒の就学の中断が多いことが学校教員より指摘されている。その理由には、経済的な問題の他、男児の教育が女兒のそれよりも優先され、女兒が就学を中断し兄弟・姉妹の世話をを行う、また、小学校高学年以上になると望まない妊娠と出産により就学を中断する、などが挙げられている。

パラグアイの農村部における食生活は、キャッサバやトウモロコシなどの炭水化物が中心であり、農村部の人々の食生活の向上はMAGの課題の一つとなっている。また、多くの農村には水道がなく、井戸水や川、湧き水を生活用水や飲料水として利用している。1994年に厚生省が中心になって実施した寄生虫検査では、農村に在住する児童の50%が寄生虫を保有しているという結果になった、という<sup>(16)</sup>。このように農村の衛生状態の改善も厚生省の課題の一つであった。

### 3-2 S村と女性たちの位置付け

S村は、カアグアス県（人口45万人、農村人口69%）コロネル・オビエド（以下、オビエド）市（人口6.4万人）<sup>(17)</sup> から最も離れている地区（約34km）の一つである。1945年以降に近郊都市や農村部から土地を求めた入植者により山林が開墾され村として形成されてきた。1997年当時の人口は380人（72世帯）であった<sup>(18)</sup>。電気は1993年に引かれ約20世帯が（1999年）、水道は2000年に引かれ約38世帯が利用している（2001年）。

S村からオビエド市に向かうには、7.5kmのテラロッサ（terra rossa）の赤土道をカレッタ（carreta：牛車）で国道まで抜け、通過するバスを拾うか、明け方か午前中に村内を不規則に通過するミニバスを拾うしかない。このテラロッサは、降雨後1～2日は道がぬかるみミニバスの運行は不可能となるため、徒歩やカレッタで隣村や国道までテラロッサの道を抜けることになる（-2001年）。独裁政権時代、ストロエスネルは農民が啓蒙され政治に関心を持つことを恐れ、故意にインフラの整備を行わず都市と農村の分断を図った（稲森 2000, p.19）。今日も農村部に残るテラロッサの赤土道は、独裁政権時代の負の遺産の一つであると言えよう。

S村の世帯の多くは20ha以下の小農であり、約8割が農業に従事している。男性は、綿花やトマトなどの換金作物の栽培を、女性は男性の農作業や収穫の手伝いと、キャッサバや豆等の自家消費作物の栽培を行ってきた（1993-95年）。村では男性が「伝統的」に換金作物の販売と世帯所得の管理を行い、女性は現金が必要な時に男性から受け取る世帯が多かった（1993-95年）。男性が作物の販売を行うのは、「女性が家や村を出歩くことははしたない」と考えられていたことや、「女性は男性より頭脳が劣るため計算ができない」と考えられていたことが挙げられる。家庭内の食事や洗濯、掃除などの再生産労働は「女性の仕事であり、男性たちが行うことは殆どなかった」。農業者世帯が定期的な所得を得ることはなく、また年間所得を正確に把握している世帯もなかった<sup>(19)</sup>。定期的な所得を得られない理由として、「綿花価格が年々下落するため、綿花を仲介業者に販売せず、土間に保管したまま」であったり、「毎年異なった種類の病虫害が発

生し、トマト栽培がふるわなかつたり」することが挙げられた(1999-2001年)。

S村の人々の食生活はパラグアイの一般的な農村と同様に炭水化物であるキャッサバやトルティージャ(tortilla)<sup>(20)</sup>などが中心であり、野菜を摂取することはあまりない。

1992年8月、S村に農協が設立された。その結果、種や苗などを農協でまとめて購入できるようになり、農村の人々のクレジットへのアクセスも容易になった。しかし、「組合に関わる人々は男性であるべき」と村では考えられていた。そのため、女性が組合員になることは1996年までなく、村内のさまざまな決定事項は通常、組合員である男性により行われていた。

村の農業改良や生活改善は、MAG/DEAGが担当している。S村は、MAG/DEAGオビエドの管轄下にあるが、そこには、女性の生活改善普及員が配属されておらず、1993年以前、S村の農村女性を対象にした生活改善に関するプログラムが実施されることはなかった。そのため1993年以前のS村では「女性同士が集まる機会はなかった」。また、ストロエスネル独裁政権の影響で、「人前に出て発言することが怖い」という女性も多い。そのような中マリア(表1参照)だけは、一度だけ近隣の町でMAG/DEAGオビエドが実施した調理講習会にバスに乗り継いで参加している。その際、「MAG/DEAGの生活改善普及員(女性)からカンペシーナ(campesina:田舎者)と馬鹿にされたのでもう二度とMAG/DEAGの事務所には行きたくない」と語る。

男性からは、筆者の知る限りでは「発言することが怖い」という声は聞かれなかった<sup>(21)</sup>。それは、村の多くの男性は農協を設立するために1989年頃から公の場で活動をはじめたことが関係していると思われる。つまり、村の男性たちは農協の設立という一連のコミュニティ開発の過程を通して地方行政官と交渉を行うなどの経験を積み重ね、公の場で発言することに「慣れていった」と考えられる。一方、女性たちはマチスモ思想やマリアニスモ思想の影響で家庭内における生産・再生産労働に従事することが多く、公の場に出る機会は1992年頃までほとんどなかった。その結果、公の場に出て発言することが怖いという、長期独裁政権の影響が男性よりも女性に強く残ってきたと考えられる。

S村の女性たちは、マチスモとマリアニスモ思想により性別役割分業が強化されており、生産労働のみならず、再生産労働やコミュニティ管理<sup>(22)</sup>を男性よりも多く担っている。また、マチスモ思想の中で語られる「女性は男性よりも劣った存在である」という言説を多くの女性は内面化していた。さらに宗教は、女性たちの性と生殖に関する意識を強く規定してきた<sup>(23)</sup>。村外では、「カンペシーナ」や「貧困な農村女性」と言われ、町の女性との間にも社会・経済階層の格差がみられる。S村の女性たちは、ジェンダー問題に加え、階層・階級格差という

複数の格差の底辺に位置付けられてきた。

### 3-3 生活改善プロジェクトの形成背景

パラグアイ政府は1952年に米国政府と技術協力の調印を行い、農村の若者を対象に教育プログラムを展開し始めた<sup>(24)</sup>。これらは、4C生活改善プログラムと呼ばれているものである。1970年代以降活発な活動が展開され、農村女性を対象にも展開された。1990年代に入ると、先にふれた通り、メルコスールへの加盟に向け、MAG/DEAG職員が農村に入り野菜栽培指導を行い、綿花から野菜栽培への作付け転換政策を展開し始めた。しかし、農村女性を対象にしたプログラムはなかった。

S村の女性たちは、村から34Km離れた近郊都市と農村部で展開されていた生活改善プログラムの一環である「野菜消費拡大プロジェクト」の存在をラジオと噂話を通して知った。このプロジェクトは、MAG/DEAGオビエドの生活改善普及員とJOCVが協力して農村で1992年より展開していたものである。S村のマリアは、サラたちと話し合い当該プロジェクトの担当者であった筆者に1993年10月、男性の農業改良普及員を介して手紙を届けた。この手紙を受け取った筆者が、担当地区ではなかったS村に向向き、S村の女性たちを話し合い、1994年1月よりS村でも「野菜消費拡大プロジェクト」を実施することとなった。このプロジェクトは、その後、生活改善プロジェクト、すなわち①野菜消費拡大プロジェクト、②ミタイロガ (*mitai roga*)<sup>(25)</sup> 子どもたちの場所、のちに幼稚園になる)設置・運営プロジェクト<sup>(26)</sup>、③ジャム加工場の設置・運営及び加工食品の販売プロジェクトとなった。筆者は、1994年1月より1995年2月まで開発支援者として関わり、栄養・衛生・調理講習会の開催をしたり、村落開発のためのワークショップを開催したり、資金調達のためコミュニティ外へ働きかけを行った。

生活改善プロジェクト開始当初設定された目的は以下の通りである。

- 1) 野菜消費拡大プロジェクト
  - a. 衛生・栄養知識の習得・増加
  - b. 献立の多様化
  - c. 野菜栽培品種の増加
- 2) ミタイロガ設置・運営プロジェクト
  - a. 建設・設置と運営の実施、村の子どもたちに西語の教育機会を付与
  - b. 多目的サロンとして利用
- 3) ジャム加工場の設置・運営及び加工食品の販売プロジェクト
  - a. ジャム加工場の運営
  - b. 加工食品の販売による所得の創出

これらの目的は、女性たちが生産活動、再生産活動、コミュニティ管理に関わる過程で導き出したニーズであり、プロジェクト開始当初の女性たちの実際的なジェンダーの利害関心であった。対象社会におけるジェンダー構造の変容を目指したような戦略的なジェンダーの利害関心は含まれていない。したがって、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関わることも含まれてはいない。なぜならば、戦略的なジェンダーの利害関心の事項は、当時の女性たちの中には明確な認識がなかったり、または言語化されておらず、住民女性のニーズとして上がってこなかったのである<sup>(27)</sup>。

それでも、村の女性たちにとっては、1994年当時水道もなく、パラグアイの中でも最貧困地区の境界に位置するS村の生活改善プロジェクトの実施は、生活改善のみならず開発支援者との接触という意味においては大きなものであった。1995年2月、筆者のJOCVとしての支援は終了したが、S村の女性たちは、1995年以降も主体的にプロジェクトを展開し、小学校や中学校・高校建設、健康診断の実施など新たなプロジェクトを立案・推進していった。中心になって活動したS村の女性たちは、高齢女性や村の多くの男性の反対に遭いながらも、村落内外の人々に働きかけ、2006年8月までプロジェクトを多様な形で継続していった。

また、筆者も調査者として1997年以降、村人に関わり続けるとともに、開発実践者としてミタイ基金<sup>(28)</sup>を1995年に設立し、S村の子どもたちを対象に小さな支援を継続している。

### 3-4 エンパワメント評価モデル抽出の背景

筆者は、S村の女性たちが実施した生活改善プロジェクトの成果（1995-99年）を当初女性たちが設定した目的に照らし合わせて藤掛モデル：「成果三類型」に分類し、評価を試みた（藤掛2001, Fujikake 2008）<sup>(29)</sup>。

このモデルの分類の方法は以下の通りである。「成果一類」は、生活改善プロジェクトの直接のインプットに対する結果である。これは実際のジェンダーの利害関心とその充足である。「成果二類」は、プロジェクトの開始当初、目的にはなかったが、生活改善プロジェクトに関わる過程で直接生じてきた「副産物的な」女性たちの意識や行動の変化である。この「成果二類」には、女性たちの満足感とともに、女性たちの中に現れたさらなる実際のジェンダーの利害関心（潜在的な実際のジェンダーの利害関心）も含まれる。満足感は、プロジェクトのインプットに対する副産物であり、かつプロジェクトの持続可能性に重要なものである。「成果三類」は、生活改善プロジェクトのいずれか、または全てに関わることで生じた女性たちの意識や行動の変化であり、既存の社会の従属構造を転換を促すような変化である。これは戦略的ジェンダーの利害関心の認知とその充足

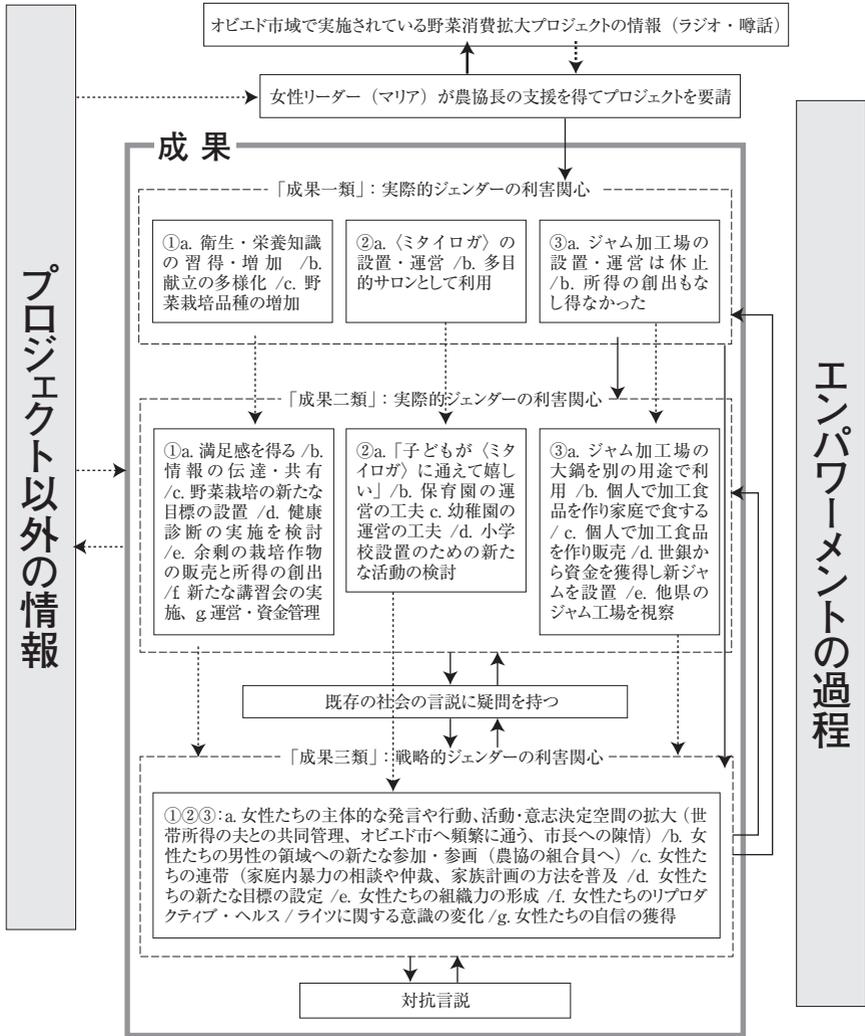


図1 S村の女性たちが実施した生活改善プロジェクトの「成果三類型」

出典：初出は藤掛洋子、日本民族学会第33回研究大会発表資料（1999年5月30日）、藤掛洋子（2003）

注1： ①野菜消費拡大プロジェクト、②ミタイロガ設置・運営プロジェクト、③ジャム加工場設置・運営及び加工食品の販売プロジェクト

注2： 「成果一類」は、目的に対する結果。「成果二類」は、女性たちが生活改善プロジェクトに参加・参画することを通して現われてきた「成果一類」の「副産物」的なもので、女性たちが感じる満足感や、個人や世帯、グループ、地域のための新たな諸事象。「成果三類」は、女性たちが生活改善プロジェクトに参加・参画することを通して現われてきた意識や行動の変化で、社会の行動様式に対し変革を迫り得る可能性を秘めた諸事象。

にあたる。筆者はこれらのプロセスをエンパワメントのプロセスと結論づけた(藤掛 2001)<sup>(30)</sup>。この「成果三類型」を詳細に記したものが図1である。

以下、本モデルに該当する対象地域の人々の「語り」と「実践」を1999年以降のデータを加え詳細に検討することを通し、人々のエンパワメントのプロセスの可視化と対象社会のジェンダー構造の変容について考察を行う。また、モデルの精緻化についても検討する。

## 4 農村女性たちのエンパワメントのプロセス

### 4-1 「成果一類」

S村の女性たちは既存の性別役割分業である家事や育児などの再生産労働を通し、家庭を担う役割の人間として野菜料理の方法を学びたいと考えた。また、日常のコミュニティ管理という労働を通し、子どもたちの場所であるミタイロガを設置・運営したいと考えた。さらに、「自分自身の所得を得たい」と考え、ジャム加工場の設置・運営を考えた。これらは、1993-94年頃、女性たちが「現状の生活を改善したい」と考え、導き出した実際のジェンダーの利害関心である。しかし、社会の中における自分自身の位置付けを相対化し、戦略的ジェンダーの利害関心を意識化したわけではなかった。

①野菜消費拡大プロジェクトの「成果一類」には、a.衛生・栄養知識の習得・増加、b.献立の多様化、c.野菜栽培品種の増加があった。女性たちはプロジェクトに参加することを通して衛生や栄養のことを考えるようになり、野菜料理を食するようになっていった。

マリア：「講習会がきっかけで、衛生について考えるようになりました。子どもに歯を磨かせたり手を洗わせたりするようになりました。調理の時は栄養を考えるようになり、野菜を食べるようになりました。」

サラ：「昔は油や塩をたくさん使っていました。しかし、最近は量を考えて調理しています。」

ミルタ：「衛生について考えるようになりました。子どもが生まれてからは、講習会で勉強した知識が生かされていますし、食事の内容は変わりました。」

グラシエラ：「畑の作物は、野菜消費拡大プロジェクトの講習会で種を購入してから種類が増えました。人参やレタス、ビート、きゅうり、パセリなど色々です。」

野菜消費拡大プロジェクトに関する半構造インタビューでは、12名中11名が「衛生について以前よりも考えるようになり、そのことは良いことである」と

語った。

同様に、12名中11名が「調理の時に栄養を考えるようになり、それは良いことだと思う」と語った。また12名全員が「献立が増加し」、11名が「それは良いこと」と語った。

②ミタイロガ設置・運営プロジェクトでは、a.ミタイロガを建設し、25名前後の幼児たちを集め女性たちが運営を行っていた。また、b.多目的サロンとしても利用されていた。

プリミ：「女性や若者同士の会議にも利用しています。組合の建物は私たちが自由に利用できないのでミタイロガの建物のお陰で（女性たち、若者たちは）大変助かっています。」

ミタイロガが多目的サロンとしても利用され、女性や若者の集会のみならず、後に述べる通りが健康診断の実施場所としても用いられていた。12名の生活改善プロジェクトに関わった調査協力者のみならず、村の多くの人々にとって重要な空間となっていたのである。

ミタイロガは、S村の女性たちの地道な奉仕活動、そして地域の女性や男性、さらには町の人々への働きかけの結果、村落内外の多くの協力を獲得し、1996年11月、文部宗教省（Ministerio de Educación y Culto）に第468私立幼稚園（Escuela Privada Numero 468）として正式な教育機関として認定された。

一方、③a.ジャム加工場の設置・運営プロジェクトについては、運営は休止し、女性たちはb.所得の創出もなし得なかった。

ミルタ：「ジャム加工場の運営はうまくいっていません。ジャムを作ってオビエドの市場まで売りに行きましたが誰にどのように売ってよいかわかりませんでした。国道沿いの売店に委託することもできませんでした。売れなくて泣きながら村に帰ってきました。せっかく作ったジャムは数日したら腐ってしまいました。」

女性たちは日常の性別役割分業の中で生産活動・再生産活動・コミュニティ管理を担っている。これらの活動の中から女性たちが直接的に認識してきたニーズ、すなわち実際のジェンダーの利害関心の充足がプロジェクトの目標となっている。したがって、プロジェクトの直接的な成果とは、実際のジェンダーの利害関心の充足の度合いであり、ここであげた「成果一類」ということができよう。「成果一類」に照らしてみると①及び②のプロジェクトは一定の成果をあげ、③のプロジェクトはまったく成果を上げていないとみることも可能であろう。しかし、③のジャム加工場設置・運営プロジェクトは後に詳細に見る通り、異なった

成果を上げていた。

女性たちは、様々な小さな成功や失敗の経験を積み重ねていく中で女性たち自身、そして開発支援者もプロジェクト開始当初は予期しなかった多様な「副産物」を生み出していた。それらが「成果二類」と「成果三類」である。

#### 4-2 「成果二類」

女性たちは①野菜消費拡大プロジェクトを実施していく過程で、多様な「副産物」である「成果二類」を生み出していた。「成果二類」には、女性たちがa.満足感を得る、b.野菜栽培の方法や、学んだ料理などの情報を他の人に伝えたり共有したりする、c.野菜栽培の新たな目標を設置する、また、学んだ衛生知識の確認のためにd.健康診断の実施を検討する、e.余剰の栽培作物を販売し所得を創出する、さらに多くの知識を学ぶためにf.新たな講習会を実施するなどがあった。

ミルタ：「以前、村には女性のための集まりはありませんでした。ですから女性たちが話したり、知り合ったりする機会もありませんでした。しかし、講習会に参加して、そのような機会が持てて本当に良かったと思います。とても満足しています。なぜならば昔の私は、毎日、朝起きて、父の農作業を手伝って、ご飯を食べて、また農作業を手伝って、夜になったら食事をして眠るだけの生活でしたから。家からは殆ど出ませんでした。」

テレサ：「農作業は増加したけれどとても良いことです。肉は買うと高いけれど、今では野菜が庭にありますし、近所の人と交換もできる。プロジェクトに参加できなかった友だちの家に野菜を届けた時におしゃべりもできるからとても良いです。」

調査協力者12名全員が「友人や困った時に相談できる人が増えた」と、そして「それはとても良いこと」と語る。

また、夫と交渉して作物の一部をオビエドの市場に持ち込み卸すようになった女性や、大根栽培を成功させて一日で「大金50,000グアラニー (guarani, 約14米ドル 1999年当時) を稼いだ」女性もいる。

サラ：「ジャムを売りに町に行って、女性が市場で働いているのを見ました。これまで我が家では野菜を家族で栽培し収穫しても、販売は夫の仕事でした。しかし、町の市場で働く女性のように私も働けるかもしれないと思って、夫に交渉して野菜をオビエドの市場に持ち込んだのです。最初は売れませんでした。しかし、そのうちに町の人は少しだけ買ってくれるようになりました。今では『新鮮だから』と言って顧客がついて、市場にも定期的に卸すように

なりました。時期をずらして栽培もしています。手は掛かりますが、季節外れの野菜は儲けが多いのです。」

11名の女性は野菜の販売により現金所得を獲得するようになり「大変満足」していた。

また、新たな講習会を開催するなど潜在的な実際のジェンダーの利害関心を認識し、その充足のための行動を起こしていた。

マリア・サラ：「私たちはもっと多くの知識を得たいと考えました。そして応急処置、散髪、洋裁、料理などの講習会の開催を依頼する要請書を農協の役員に書いてもらいました。そしてMAG/DEAGの男性職員に依頼してオビエド市にある国家サービス推進局へ要請書を届けてもらいました。その結果、菓子作りの講習会を1998年9月-11月まで3ヶ月間、毎週月曜日から金曜日の午後、開催することができました。」

しかしg.運営・資金管理はできていなかった。

②ミタイロガ設置・運営プロジェクトでは、a.「子どもがミタイロガ（後の幼稚園）に通えて嬉しい」、b.保育園の運営の工夫、c.幼稚園の運営の工夫、d.小学校を設置するための新たな活動の検討などがあった。

ルシー：「幼稚園ができて本当に良かったです。満足しています。私には子どもが7人いますのでとても助かっています。」

調査協力者の12名全員、そして村の多くの人々が「地域や自分の子どもたちがミタイロガに通えるようになって大変良かった」と語る。また、幼稚園の運営を円滑に行うために村の女性たちがさまざまな協力を行なっている。

サラ：「幼稚園は5歳以上の子どもが対象なのですが、もっと小さい子どもやもっと大きい子どもも来ました。それで、小さい子どもには、お昼の14:00-16:00に来るようになって保育園として運営する工夫をしました。中学生の私の娘が奉仕で先生をしていました。」

カシミラ・ビクトリア：「私たちは幼稚園の周りの掃除をしたり、お花を植えたりしています。」

③ジャム加工場の運営は、女性たちが当初考えた目的である食品加工場としても、販売場としても運営されず、女性たちの所得の創出も成し得なかった。しかし女性たちは、a.ジャム加工場の大鍋を利用して幼稚園の牛乳を沸かしたり、b.個人で加工食品を作り家庭で食したり、c.個人で加工食品を作り近隣の農村で

販売したりしていた。グループとしての活動は休止しているものの、加工食品を自宅で作ることができるようになった女性が8名おり「自宅でジャムを作れて嬉しい」、「子どもに食べさせることができ満足している」と言う。また、自宅で作ったジャムを近隣の村で個人的に販売し現金を得ている女性が4名おり「大変満足している」と語る。また、サラは、「ジャム工場は、今は動いていないけれども、いつの日かこの村に大きなジャム工場を建て、運営し、子どもたちに働く場所を残すことが夢」と語る。そして、女性たちはペドロの支援を受け、商工省の職員を介して、d.世界銀行の小規模融資<sup>(31)</sup>を引き出し、ミタイログの建物の斜め前に白いコンクリート製の建物を新ジャム加工場として建築していた(写真1)。さらに、将来のジャム加工場の運営に向けe.他県のジャム工場を視察に出掛けていた。



写真1 新たなジャム加工場を建設  
(1999年 筆者撮影)

「成果二類」は、女性たちが当初設定した目的である実際的ジェンダーの利害関心を充足していく過程で生み出された「成果一類」の「副産物」であり、潜在的な実際的ジェンダーの利害関心の発見とその充足に向けた意識や行動の変化であった。「成果二類」は、既存の性別役割分業を改め、女性が置かれている従属的な位置を覆すことにはならず、戦略的ジェンダーの利害関心の認識ではない。しかしながら、戦略的ジェンダーの利害関心を認識し、充足するための活動を行うためには、実際的ジェンダーの利害関心を充足する必要があると考える。自己の状況を相対化しながら「成果二類」を経るような気付きのプロセスが必要であり、このプロセスがエンパワーメントのプロセスであると考えられる。

女性たちは小さな成功や失敗の経験を積み重ねていく中で、「女性は頭脳が劣るから計算ができない」、「女性は家や村から出歩くものではない」、「Hasta que Dios diga basta. (神が十分とおっしゃるまで子どもは授かり続けるもの)」(藤掛2003)といった村の既存の言説に疑問を持ち始めた。女性が社会の中で位置付けられている従属構造に対し疑問を持ち始めたのであり、戦略的ジェンダーの利害関心を見出しはじめたということができる。

### 4-3 「成果三類」

「成果三類」は、生産活動・再生産活動・コミュニティ管理などの多様な活動の中から生まれてきた。「成果三類」には、a.女性たちの主体的な発言や行動、活動・意志決定空間の拡大（世帯所得の夫との共同管理、オビエド市へ頻繁に通う、市長への陳情）、b.女性たちの男性の領域への新たな参加・参画（農協の組合員へ）、c.女性たちの連帯（家庭内暴力の相談や仲裁、家族計画の方法を普及）、d.女性たちの新たな目標の設定、e.女性たちの集団としての形成、f.女性たちのリプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する意識の変化<sup>(32)</sup>、g.女性たちの自信の獲得などが見られる。

世帯所得の管理は、以前は夫や父が行っていた。しかし、プロジェクトの実施過程において女性自身が世帯所得を行うようになった者が3名、夫と一緒に行うようになった者が3名に増加している。

「成果三類」に見られた意識や行動の変化について調査協力者12名中11名の女性が、「私は変わった」と語った。その中には中心になって働いたマリアや、マリアとともに働き後に女性グループのリーダーになったサラのみならず、夫から家庭内暴力を受けてきたビクトリアや中途から生活改善プロジェクトに参加したルシーも含まれた。

ビクトリア：「昔は夫が強く、これまで家庭内暴力を振るわれてきました。私は怖くて発言などできませんでした。しかし、講習会に参加してから私は変わりました。今では夫と平等です。今の私はとても変わりました。今の自分にとても満足しています。」

ルシー：「以前はセニョール（Señor：ここでは内縁の夫のことを指す）に対して意見などはできませんでした。しかし、今ではできるようになりました。もっと早くからプロジェクトに参加していれば良かったと悔やまれます。野菜消費拡大プロジェクトが村で開始された時、私は妊娠していましたし、スペイン語ができないから参加するのが恥ずかしかったです。夫も家を空けることに反対しました。しかし、今、私は、誘われて青空市に参加していますし、講習会の一環で首都のアスンシオンにも行きました。自分が学べなかった野菜料理は他の女性たちから教えてもらいました。私はとても〈カンビオ cambio（変わったという意味で農村女性は用いている）〉しました。今の活動にはとても満足しています。これからは女性の集まりにどんどん出て行くつもりです。」

ルシーのように村の中で社会・経済階層が低いと考えられる女性の多くは、開始当初のプロジェクトには参加していなかった<sup>(33)</sup>。モリヌーは、貧困層の女性

は実際のジェンダーの利害関心の充足のために最も動員される存在であると指摘している (Molyneux 1987, 2001)。しかし、S村の事例のように社会・経済階層の低い女性は、村社会にある排除の構造、すなわち村社会が貧困層を排除する構図と、自分自身に経済的な余裕がないために自らプロジェクトに参加することが困難であるという2つの点に留意が必要である。つまり、容易には動員されないのである。

「神の意思に背く」と言われてきた家族計画についても12名中11名の女性が「家族計画は必要である」と語る。不要というテレサの語りは、「子どもが二人とも女の子であり男の子が欲しいから家族計画をしていない」というものであった。

多くの女性たちは、パートナーの男性や家長である父親の従属下にあり、「カトリックの教え」と言われる言説や高齢女性により再生産される言説により性と生殖の意識や行動を規定されてきた。また、スペイン語ができないから地方行政職員や開発協力者などの前にあまり出たくないという女性も存在した。しかし、女性たちは自身の置かれる個々の状況に折り合いをつけつつ、ある者ははじまりから、ある者は中途からプロジェクトに関わることを通して自己の状況を相対化する中で、構築されてきた自己を再/脱構築し、「カンビオ (変わった)」という言葉に象徴されるような変化を起こしていた。これらの過程を筆者は女性 (たち) のエンパワーメントのプロセスと捉えた。エンパワーメントのプロセスでもあるこのような女性たちの諸活動は、女性自身が位置する文脈の中で女性自身により見出されることが重要である。なぜならば、女性自身が「世帯所得の管理をしたい」、「家族計画をしたい」と考える十分な心構えやその女性を支援する地域や社会の体制がなければ、世帯内外で起こりうる衝突に適切な対応はできないからである。「成果三類」は、実際の (潜在的) ジェンダーの利害関心を充足する過程において女性たちの戦略的ジェンダーの利害関心が「発見され」、そしてその充足に向かったものなのである<sup>(34)</sup>。

ところで、女性のエンパワーメントを考える場合、どのような事象でも人々がエンパワーさえすれば良いのか、という疑問も残されるであろう。しかし、対象社会には対象社会の人々が作り上げている規範や統制機能がある。例えば、S村の女性グループの中で、「金銭面で不正を働いた」と噂される女性は、女性グループの活動に呼ばれなくなり、不正な取扱いに関する会議も開催された。よりよい開発を行うためにコミュニティの中で新しい規範が作られ、コミュニティエンパワーメントがなされているのである。ここでみられた対象社会で生起する個人やグループ、コミュニティのエンパワーメントのプロセスを外部者は丁寧に見ていく必要があると考える。

これまでみてきた一連の意識や行動の変化の中から女性たちは、女性を男性の従属下におくような村の既存の言説に対し、対抗言説を提示し始めた。「女性の方が世帯所得の管理に適している」、「女性たちは男性たちよりも青空市での野菜売りがうまい」、「神様は子どもを養ってはくれない」(藤掛 2001, 2003) などである<sup>(35)</sup>。

## 5 村落内外のジェンダー関係の変化の萌芽

S村の女性たちの「カンビオ(変わった)」という言葉に象徴されるエンパワーメントのプロセス、換言するならば主体構築の過程は、男女の性別役割分業といった女性たちを取り巻く村落内外におけるジェンダー関係にも変化の萌芽を生み出した。

### 5-1 村落内におけるジェンダー関係の変化

#### (1) 世帯内

##### ①男性パートナーとの関わり方

女性たちは、市場に出向き、自身で余剰野菜の販売を行うことを通して、「二人で働いて得た世帯の所得は自身も使う権利がある」と考え、既述のように世帯の所得を夫と共同で管理するようになっていった。さらに、「妻の方が信頼できるから」と妻に世帯所得の管理を全て任せる男性も出てきた。

サラ：「講習会に参加する前まではいつも必要なものを〇〇がほしいからいくら下さいと言って夫に(現金を)もらっていました。しかし、二人で働いて稼いだお金は私にも使う権利があると気づいたのです。そして夫にそう言いました。今では夫はお金の管理を私に任せてくれています。」

サラの夫ホセ(1958年生まれ)：「妻の方が金銭管理は上手だとわかりました。今では任せっきりです。」

ビクトリア：「以前、世帯所得は夫が管理していました。『俺は男だ』と言って。しかし、今では私のやりくりのうまさを見て、夫が『おまえの方が安心だから管理してくれ』と言っています。驚きです。」

ビクトリアの夫パブロ(1943年生まれ)：「私がお金を持っているとカーニャ(トウモロコシの焼酎)を買って飲んだりしてしまうので、妻が管理する方が良いとわかりました。」

女性たちの意識や行動の変化がこのように男性たちの意識や行動の変化を促し始めたと言えよう。女性たちの活動が男性や世帯、地域に有益であると村の人々

が認識し始めたことも一つの大きな要因であると考える。

女性たちは、1997年以降、オビエド市で実施されている青空市へ不定期で参加するようになり、2000年頃からその参加が定期的になっていった。その結果、明け方1時に家を出る妻の代わりに4時30分には台所に入り、子どもたちのために朝食の支度をするようになった夫（男性）も出てきた。

ホセ：「昔は男が台所で食事を作るなど考えられませんでした。しかし、週に2-3回は妻が明け方からフェリアに行きます。その時は私か長女が朝食を作ります。」

サラ：「これまで夫はマッチョ（マクスモ的な男性のこと）で私たちは子だくさんで自分のやりたいことは何もできませんでした。しかし、夫はとても変わりました。今、私は幸せです。」

ビクトリアは夫を農協に組合員として加入させていた。

ビクトリアの夫パブロ：「妻に言われて嫌々ながら組合に参加しました。人見知りなので人と会って話さなければならぬ組合は嫌いでした。それに私の年代は独裁政権の影響でしょうか、人前で発言することには慣れていません。でもクレジットができるようになりましたので、今は組合員になって良かったと思っています。」

さらにホセは、「今の土地はわたしの名義なので、二人は働いて貯蓄したお金でこれから購入する土地は妻の名義にする」と語る。

## ②子どもとの関わり方

女性たちはプロジェクトで学んだ「栄養の知識や衛生知識」を娘たちに教えている。また、プロジェクトで活躍する母親を見て「母の活動に鼻が高い」と感じている娘たちもいる。

カシミラ：「私は小学校をきちんと出ていないので昔は娘に何をどう教えてよいかわかりませんでした。しかし、今は講習会で学んだ知識を掃除や調理の時に娘に教えています。」

サラの娘：「母の活動は村の人にとっても役立っていると思います。私は母の活動にとっても鼻が高いです。」

女性たちは生活改善プロジェクトを通して学んだ調理や裁縫、編物の技術を娘たちに伝えるとともに、「小学校しか出ていないけれど私にも教えることができる」と自信を獲得している。

テレサ：「昔は何も知りませんでした。小学校しかでていませんから。しかし、今では娘に編物を教えられます。娘が作った編物の作品を学校の先生にプレゼントしたところ、大変驚かれて、喜ばれて、誉められて、どこで学んだのかと聞かれたそうです。そして『友達にも教えてあげなさい』と言われたそうです。私はそのことを娘から聞いてとても満足しています。」

家庭内における息子の役割は、農作業の手伝いである。娘の役割は、農作業の手伝いととも食事の準備や後片付け、衣類の洗濯やアイロン掛け、家畜の世話、兄弟姉妹の世話である。パラグアイの農村では、娘が生まれると、兄弟の洋服を洗う人間ができたという諺がある (Ponpa Quiros 1996, p.34)。このことから男児と女兒の「伝統的」な性別役割分業と男女間の労働量の不均衡が推測される。しかし、男児の中には、母親の活動に影響を受け、洗濯をしたり、学校の制服に自身でアイロン掛けたりする者もできてきた。また、母親や姉妹の調理を手伝う男児もでてきた。プロジェクトに積極的に関わっている母親（マリア、サラ、ビクトリア）の子どもたちに特にその傾向が強かった。

### ③実母や義母の女性たちへの語り

これまで高齢の女性たちは娘や息子のパートナーが村を出歩くことを良しとしなかった。しかし、女性たちの実母や義母は、女性たちの活動が村落社会に貢献していることがわかると、女性たちの活動を支援するようになっていった。

カシミラの義母：「昔は女性が家から出ることなど考えられませんでした。そのようなことをすると、勝手なことをすると言って夫から木の枝や皮のひもでよくぶたれたものです。しかし、今は時代が変わりました。孫にも村の子どもにも教育は必要ですから村に幼稚園ができたことは大変良いことだと思います。そのために女性が家を出るのは仕方のないことでしょう。」

サラの実母：「娘がプロジェクトだとかんとか言って家を出歩くことには反対でした。そのことではいつもけんかをしていました。しかし、娘たちの活動は村の活性化に貢献しているようですし、それはとても良いことだと思います。それに、今は綿花もキャベツも何も売れません。女性も働いて、なんとかお金を稼がないと生活していけません。」

また、女兒に教育は必要ないと考えていた母親たちも娘を町の学校に送るようになっていった。

プリミの実母：「子どもはよく考えて産む時代になったのだと思います。娘には

まず勉強をしてもらい、安定した職を得てから結婚してもらいたいです。ですから学校にやるために娘を村から出すことにしました。」

## (2) 世帯外

### ①異なった社会・経済階層の人々との関わり方

S村でプロジェクトに主体的に関わった女性たちは、20代から30代であった(1994年当時)。女性たちの活動は義母や実母たちのみならず、プロジェクトに参加していない40代以上(1994年当時)の女性たちからも反対されてきた。なぜならば、女性たちが農協の男性や普及局の男性職員と話したり、外出したりすることは「良くないこと」、「はしたないこと」と考えられていたからである。そのため女性たちの活動は世帯内のみならず、世帯外においても「多くの女性たちから陰口を言われ、反対されてきた」。しかし、村のミタイロガの運営が軌道に乗り、後に幼稚園として文部省に正式に登録され、多くの子どもたちに便益が届くようになると、「女性たちのプロジェクトは高く評価」されるようになっていった。

一方、社会・経済階層の低い女性たち、例えば未婚で8人の子どもを育てる女性などは、時間を捻出できず、女性たちのプロジェクトに参加することができなかった。社会・経済階層による格差と差別の構造が問題であると考えられる。結果、プロジェクト活動から学ぶことができた女性と学ぶことができなかった女性間の情報量のさらなる格差が拡大していった。

### ②農協との関わり方

農協は、組合員になるために入会金として70,000G(約35ドル)を納め、年間50,000G(約25ドル)の組合費を支払う必要がある。世帯で現金を扱い、公の場に出るのが男性であったことから、女性が組合員になることは1996年までなかった。1994年4月におけるS村の組合員数は男性25名、1999年は男性30名であった。しかし、1996年にはマリアがまず組合員に登録し、その後少しずつ女性の組合員は増加し、2001年の4月には農協の組合員に12名の女性が登録(男性組合員は31名、2001年4月)していた。女性たちは「自身で得た所得をたんす預金し」、農協の入会金と年会費を支払っていた。また、マリアは男性の役目と考えられていた農協の役員候補に選出されていた(2001年4月)。

これまで女性たちは、組合の男性役員に対し、プロジェクトの要請書の作成や資金の調達、幼稚園の椅子の購入などを依頼してきた。しかし、女性たちが農協の組合員になることで、クレジットを受けることも可能となり、女性たち自身によるさらに主体的な生活改善プロジェクトの運営も可能となる。また、投票によ

りマリアが農協の役員候補に選出されたことは、村の意思決定機関に女性がさらに一歩踏み込んだことを意味しており、今後は女性たちの生活改善プロジェクトのみならずより広い意味におけるコミュニティ内の政治的決定やコミュニティ開発計画に女性の意見が反映される可能性も見出しうるのではないかと思われる。

## 5-2 村落外におけるジェンダー関係の変化

### ①市場の女性たちや町の女性たちとの関わり方

女性たちは生活改善プロジェクトを実施し、成功や失敗、交渉の経験を蓄積する過程で、活動空間が拡大していった。その中の一つにオビエド市にある市場の女性たちとの関わりがある。S村の女性たちは余剰の野菜を市場に持ち込み、販売することを通し卸売市場で固定客を形成するに至った。そして、フェリアといわれる青空市に行く前に、卸売市場の女性から注文された生鮮野菜を麻袋や木箱に詰めて納品するようになっていった<sup>(36)</sup>。

マリア：「私たちは最初、きゅうりを1箱持って市場やフェリアに行きました。ジャムも瓶詰にして売りに行きました。しかし、これらは全く売れませんでした。悲しかったです。泣きもしました。それで私たちは原因を考えました。私たちの持っていく野菜の値段は他よりも安い。野菜はもぎたてで新鮮だし、品質には自信がある。では何が原因なのだろうと。その答えは接客態度だったのではないかと思うようになりました。私たちはカンペシーナだから、町の人よりも劣る、と卑屈になっていたのだと思います。でもそれでは駄目だと思ったのです。」

サラ：「売れなくてくよくよしても仕方ないから、私たちは明るく接するように努力しようと思いました。」

カルメン、サラ、ビクトリア：「売れなくてもフェリアに参加し続けていると、だんだん私たちの顔を覚えてくれるお客さんがでてきて、今ではいつも顔を見て買ってくれるようになりました。」

マリア：「1995年、1996年頃は、町の人々が私たちからきゅうりなどを買ってくれるなんて考えもしませんでした。でも今はこの通りです。」

女性たちは、町の人々が自分たちが栽培・収穫した野菜を購入してくれるなど考えもしなかったと述懐する。そこには町の人とカンペシーナという階層格差や自己卑下の感情を内面化している姿が浮かび上がってくる。しかし、小さな成功の経験や失敗を積み重ねていく上で、売れない原因を分析し、主体的に、そして前向きに行動を起こしていることがわかる。これらのプロセスは女性の個人のエ

ンパワメントであり、グループとしてのエンパワメントである。

## ②町の病院関係者との関わり方

S村では、女性たちや高齢者、子どもたちが町に出掛けることは多くない。そのため、マリアとサラは、村に医者をもたらすための努力をしてきた。二人は村で集団検診するために何度もオビエド市中央病院に足を運び、医者と交渉し、1997年4月には女性たちの手により第1回目の健康診断をミタイロガの建物を利用して実施している。マリアとサラは村の人々にとって「敷居」の高い病院に出向き、交渉をする能力を培ってきたのである。中央病院の医師らは、「村人が要請に直接来ると、問題があるならば行ってみようという気になる」と言う。このような相互作用は注目に値する。

また、「積極的に活動する村人のいる村を政府の地方職員やNGOの職員は好む」と現地のNGO職員は指摘する。なぜならば、「政府職員にもNGO職員にも村人の積極的な活動は自身の報告書の実績になるからだ」と言う。このように女性たちの労働が他の援助機関などの職員の実績に包摂されるという事実は現実に存在し、女性たちが動員されている点は考察すべき点であるものの、相互作用の中から生み出される女性たちの経験の蓄積もまた大きな意味を持つものと思われる。

## ③市長との交渉

マリアをはじめとするS村の女性にとってこれまで市長との面会も交渉の経験もなかった。しかし、マリアとサラは、「村の生活を改善するためには、まずに村の生活を見てもらうべきだ」と考え、オビエド市にある市庁舎を何度も訪問し、市長に面会するために数時間待ち、村の状況を陳情している。「市長には5回陳情に行った」という。市長は、「村の人から直接訪問を要請されたのは初めてであり、是非とも村を見たいと思った」と言う。この市長が任期中実際に農村部を直接訪問したのはS村が初めてであった。

1997年4月3日、S村において市長を交えた青空会議が開催された。会議では、村の男女から村の状況が説明された。また村人それぞれが考える村の問題点や要望もあわせて陳情された後、約1時間に及ぶ青空会議は終わった。会議の終わりに市長は村の人々にいくつかの口約をしたが、これらは2006年になっても一つとして守られていない。しかし、マリアやサラが市役所に5度通った結果、村における青空会議が実現したこと、村の人々が市長の前で様々な要望を陳情したことはマリアやサラ、そして女性たちのみならずS村の人々にとって重要な経験の蓄積になっている。

2004年に、ミタイ（子ども）基金と連携し、学校建設のための働きかけをした際も、S村の人々は首都アスンシオンにある在パラグアイ日本大使館に足を運び、学校の校舎建設のための要請を行ってきた。そして2006年にS村に中学・高校の校舎を建設した。村の女性たちの一つ一つの小さな成功や失敗が必ず次なる活動の基礎となってきたのである。

#### ④世界銀行現地職員との交渉

ジャム加工場の設置・運営プロジェクトは、1995年の設置以来1999年3月までS村の女性たちが当初考えた目的である食品加工場としても、販売場としても運営はなされていなかった。また、女性たちがジャム加工を行うことを通してグループとして所得を得ることもできていなかった。しかし女性たちはジャム加工場の稼動を諦めてはいなかった。

女性たちは既述のようにペドロの支援を受けながら商工省の職員と新たなジャム加工場設置のための交渉を行うとともに、世銀の小規模融資を引き出している。

サラ：「みんなで一緒に働かないと村の生活は絶対によくならない。子どもたちのために村に働く場所を残したい。それが、私たちがジャム加工場を新たにやろうとしている大きな目的なのです。」

そして、サラは女性グループの代表として首都のMAG/DEAGに出向き小規模融資の調印式に出席している。サラは「首都で偉い人々の前でスピーチをしてとても大きな自信につながった」と言う。さらに、女性たちは、他県にあるジャム加工場を見学し、加工食品の作り方を学んでいた。

サラ：「新しいジャム工場の運営のために、一度有志でカアクベ県のジャム工場を見学に行き、色々と学んできました。」

1999年2月26日の朝8時からマリアとサラは外出用の小奇麗な服装で、試作品用のトマトピューレを作るために大量のトマトを洗浄していた（写真1）。この日の午後、世界銀行と契約しているコンサルタントが加工食品の指導に来村し、トマトピューレの出来具合の評価をするのだ、と言う。この評価に通れば世界銀行が工場運営にかかるさらなる資金の貸し付けを行なう、と言う。

ペドロ：「今日の昼過ぎに指導員が来て保存食の出来具合を評価してくれます。この評価に通れば世界銀行が小規模工場用の運営資金をさらに貸し付けてくれることになっているのです。そうすれば女性たちのプロジェクトを再開することができます。」

サラ：「(加工の手順が書かれた紙片を指差しながら) このレシピはとても大切なものなのです。ここに書かれている通りの分量で材料を入れなければならぬし、手順も間違っはいけないのです。」

#### ⑤小学校・中学校・高校の建設

S村には、1994年当時、教会以外に教育に関連する建物はなかった。1995年にミタイログが設置され、1996年11月に文部宗教省に正式な幼稚園として認定され、S村以外の子どもたちもS村のミタイログに通い始めた。ここに至るまでに、マリアやサラは村人から様々な反発を受け、「村をうろろうろ出歩くはしたない女性」と言われてきた。しかし、「子どもたちのため」と「村の発展のために」努力してきたのである。

村の女性たちにとって小学校・中学校・高校の建設が次なる夢であった。女性たちは、2004年8月、当時の村長と現地NGO、ミタイ基金の支援を受け、在パラグアイ日本大使館に草の根無償資金協力の申請を行い、2006年に学校建設を行った(写真2)。今では、幼稚園を卒業した子どもたちが村にある小学校・中学校に通っている。



写真2 新しくできた学校に通う子どもたち (2006年9月5日、筆者撮影)

これまで確認してきたように、1993-95年頃のS村の女性たちは、宗教や言説、年齢、経済・社会階層、歴史、マチスモ・マリアニスモ思想などにより農村女性として構築されてきた。しかし、生活改善プロジェクトに主体的に関わることを通して自己を再/脱構築し、その過程で起きてきた女性たちの意識や行動の変化は、世帯内外の男女間や世代間、社会・経済階層間におけるジェンダー規範に再編の萌芽をもたらした。また、村落外の人々との関わり方にも変化が認められた。このように、女性たちの活動は、対象社会の既存のジェンダー構造の変化の萌芽を導き出したのである。

## 6 おわりに

パラグアイの農村女性（たち）の意識や行動は、宗教や言説、年齢、経済状況、経済階層、歴史、そしてマチスモ・マリアニスモ思想などにより複雑に規定されてきたことが明らかになった。しかし、このような農村女性（たち）は、ミクロレベルのプロジェクトに主体的に関わることを通し意識や行動を変化させ、対抗言説を生み出してきた。そして女性（たち）は、社会に存在するジェンダー規範や世代を超えて語り継がれ再生産される言説に抵抗の実践を行っていた。女性たちの「カンビオ（変わった）」という言葉に象徴されるエンパワーメントのプロセスは、女性たちの位置するミクロな世界である世帯内外のみならず、村落内外における社会関係にも変化ももたらした。

女性たちが位置する社会は、「外部」から隔絶され孤立したものではない。女性たちは常に外部との相互作用が生じる「場」に生きているのであり、エンパワーメントをさせる側とされる側という二項対立的な視点では、対象社会で生起する諸事象を分析することは困難である。多様な人々との関わりの中で生成される人々の意識や行動、そしてエンパワーメントのプロセスを時間や空間という軸も織り交ぜて検証することが求められる。

本稿では、女性たちが生み出す抵抗の「語り」と日常の「実践」を取り上げてきたが、このことは女性たちの置かれる社会の従属構造が根本からなくなったことを意味するものではない。それでもなお、対象社会の女性たちは、外部者により一方的にエンパワーメントされる存在ではなく、世帯内外や村落内外における複雑に交錯した権力の多様な次元において、多様な他者との折り合いをつけ、交渉を行ないながら、自己を再構築し、新しい社会を創造し得る存在なのである。

女性のエンパワーメントのプロセスは、エンパワーメントさせる側、される側という二項対立的な枠組みではなく、多様な次元から考察することによりはじめてその諸相が明らかになるのである。また、本稿でみてきような当事者のエンパ

ワーメントのプロセスを可視化し、開発実践の現場に提示していくことが今後の社会開発には重要であると考えます。本稿で示したエンパワーメント評価モデルは、そのためのツールの一つとして有効であると考えます。

(ふじかけ ようこ 東京家政学院大学)

## 〔謝 辞〕

1993年1月より交流を続けているパラグアイ、そして農村S村の方々とコロネル・オビエド市G家の方々には長きに渡りお世話になっている。ここに記して心から感謝の意を表したい。

## 〔注〕

- (1) 力をつける、と訳されるempowerの語源はラテン語のpotentia = power (力、力がある)である。The Oxford English Dictionary, second edition (1989)によると、empowerは、1. To invest legally or formally with power or authority; to authorize, license (1964-) や、2. To import or bestow power to an end or for a purpose; to enable, permit (1681-) .であり、権力を付与するといった意味が含まれる。
- (2) 開発の意味は多様であり、その歴史は古くからみることができる。本稿では、西欧植民地支配に始まり、各国の独立後は、冷戦下において始まったアメリカ主導の国連諸機関を動員した開発戦略を開発と定義する。
- (3) 女性と開発 (Women in Development:WID) /ジェンダーと開発 (Gender and Development: GAD) を総称したものを本稿では「ジェンダーと開発」と記す。
- (4) 「北京行動綱領」のG:「権力及び意思決定における女性」において、女性のエンパワーメント及び社会的、経済的及び政治的地位の向上は、透明で責任ある政治・行政及びあらゆる生活領域における持続可能な開発にとって不可欠である、と承認し、メディアなどを通じて、エンパワーメントの概念が一般に広まってきた。
- (5) 本モデルは、JICAがホンジュラスにおいて実施している「ホンジュラス共和国地方女性のための小規模起業支援プロジェクト」(2004-2008) のエンパワーメント評価にも利用されている (詳細は、Fujikake & Kurodaを参照されたい。)
- (6) マリアニスモは聖母マリアに由来し、聖母マリアに象徴される母性的なる女性の優しさ、忍耐強さ、道徳性、包容力などが尊敬の対象とされる (Stevens 1973)。
- (7) エンパワーメントという用語には、性善説的な規範概念としての含意があるが、エンパワーメントを分析概念として用いることが重要である (原 1999, pp.91-92) と指摘されている。
- (8) 開発支援者にも多様なポジションや「介入」のレベルがあり、思想も信念も一枚岩ではない。「介入者」と村人との相互作用については別稿で改めて論じたい。
- (9) JICAは2003年10月1日より独立行政法人国際協力機構となった。
- (10) 1997年3-4月:第1回フィールド調査 (学術調査者として)、1998年4月:第2回フィールド調査 (学術調査者として)、1998年12月-1999年3月:第3回フィールド調査 (JICA短期技術協力専門家として)。2001年3-4月:第4回フィールド調査 (学術調査者として)。2002年2月:第5回フィールド調査 (学術調査者として)。2004年8月:第6回フィールド調査 (学

術調査者として)、2006年8-9月:第7回フィールド調査(学術調査者として)。用いた調査方法は、参与観察とアンケート票を用いた半構造インタビュー、文献調査などである。調査した内容は、できる限り録音し、逐次フィールドノートに記録を取った。録音したものは、細かな表現も含めテープ起こしを行い文字化に努めた。西語から日本語の翻訳は筆者が行った。1999年までの調査票は藤掛(2000)を参照されたい。

- (11) 表1の未婚の欄に、「未婚の母」と「内縁の妻」という分類がある。これらの女性たちは、村におけるコミュニティ活動に参加したいが、「経済的に余裕がない」、「子どもの世話をしてくれる人がいない」などの理由から、1994-95年の間に実施された生活改善プロジェクトには参加しておらず、1995年以降、参加している。このような女性たちは、プロジェクト開始当初、既婚の女性たちから排除される傾向にあった。村では、未婚の母や内縁の妻は、社会・経済階層低い世帯であるといえる。
- (12) M. S. P. y B. S./O. M. S, *Proyección de Población*, 1998.
- (13) [http : www//DBHOST 2/cgi-bin/adetail](http://www//DBHOST2/cgi-bin/adetail) (1998年10月20日アクセス) 及び国際協力事業団(1998)参照。
- (14) 植民地期に作られたラテフォンデュ(大土地所有)とミニフォンデュ(零細土地所有)型の土地所有構造が残っている。
- (15) Presidencia de la República Secretaria Técnica de Planificación, Dirección General de Estadística, *Encuesta y Censos 1998*, p.89.
- (16) コロネル・オビエド市中央病院で実施した寄生虫検査の結果に関する病院関係者への筆者の聞き取りによる。
- (17) 人口は、FNUAP 1995 *Necesidades Básicas Insatisfechas* Dirección General de Estadística, *Encuesta y Censos* より引用、調査年不明。
- (18) 筆者自身の世帯調査による。なお、Población total por sex, Alfabetismo, asistencia a una institución de enseñanza, total viviendas y disponibilidad de servicio por vivienda según departamento, distrito, área urbana rural y barrio localidad. 1992 (未刊行資料), p.52.では、人口419人(男性224人, 女性195人, 120世帯)である。近郊都市への移動・移住が多く観察される。
- (19) トマト栽培で成功している農協長のペドロは、村の高額所得者で年収は約2000-2400米ドル(1997, 1998, 2001年)であった。しかし、ペドロを含めた多くの農業者世帯が、農薬などの必要経費を把握していないこと、家畜の販売や乳牛から取れる乳や自家製チーズなどの不規則の販売を適切に把握していないことなどからS村の世帯所得の把握は村人にとっても筆者にとっても今後の課題である。また、村の多くの人々が家計管理を学びたいと考えていた(2001年4月)。
- (20) 小麦を練って油で揚げたもので中にはみじん切りのたまねぎがわずかに入っている時がある。メキシコなどで見られるトウモロコシを粉にして石灰を混ぜて焼いたトルティージャとは全く異なるものである。
- (21) 男性に同様の質問をした際、高齢の男性などは、公の場で発言することを好まない(no me gusta)と回答し、怖い(tengo miedo)という回答はなかった。
- (22) 洗濯場としての小川や湧き水の管理を行ってる。
- (23) 女性たちの性と生殖に関する意識とその変化については藤掛(2003)を参照。
- (24) Ministerio de Agricultura y Ganadería, *Programa de asistencia técnica a la juventud rural 1995/1998*, Paraguay, 1995, p.1.
- (25) グアラニー語はイタリック体で表し、本文における英・西語と区別する。
- (26) S村では他の農村と同様に日常生活にグアラニー語を用いる。しかし、女性たちは、「子ど

もたちには町の子どもたちのようにスペイン語を上手に話せるようになってほしい」と考えていた。また、「畑仕事に行く際、子どもたちを一時的に預ける〈ミタイログ〉があれば良い」と考えていた。

- (27) プロジェクトの詳細は藤掛 (2000, 2001) を参照されたい。
- (28) ミタイ基金の詳細は, <http://www.yk.rim.or.jp/~yoquita/> を参照されたい。
- (29) 女性たちが、どのように生活改善プロジェクトの結果を理解しているのかを把握するために、生活改善プロジェクト実施以前と実施以後の生活の変化について過去をふりかえりながら語ってもらった。その結果を、筆者がプロジェクト開始当初の目的に照らし合わせ、「成果の三類型」のいずれかに分類した。1997年と1999年に実施した半構造インタビューの質問票や回答の詳細は藤掛 (2000) を参照されたい。
- (30) これらの「成果一類」, 「成果二類」, 「成果三類」は全て、女性たちが「生活改善プロジェクトに参加したから」「〇〇プロジェクトに参加したから」と回答したものである。
- (31) 融資金は、55,000,000G (約28,871ドル1999年当時)。
- (32) 藤掛 (2003) もあわせて参照されたい。
- (33) Ibid.
- (34) この点はMolyneux (1987, 2001) においても論じられている。
- (35) プロジェクトへの関わり方や交渉のあり方は諸個人により異なる。「成果三類型」は女性たちの集会的なエンパワーメントの過程であり、個人のエンパワーメントについての詳細な分析は今後の課題である。
- (36) 女性たちはフェリアに行く時に市場に立ち寄り注文を受ける。そして、数日後から1週間後に再びフェリアに行く時に受けた注文の品を届けている。

#### [引用・参考文献]

- Arditi, Benjamín 1989 “Adios a Stroessner; nuevo espacios, viejos problemas.” *Nueva Sociedad*, 102, pp.24-32.
- 青木恵理子 1999 「エンパワーメント empowerment に関する文化人類学的考察」, 内山田康編 『ジェンダー—エンパワーメントを考える—』, 財団法人 国際開発高等教育機構国際開発研究センター, pp.10-25.
- Bareiro, Line & Soto, Clyde 1997 “Women.” Lambert, Peter & Nickson, Andrew. (eds.) *The Transition to Democracy in Paraguay*, Macmillan Press Ltd., New York, pp.87-96.
- コンネル, ロバート・W. (森重雄他訳) 1993 『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学—』, 東京: 三交社.
- 江原由美子 2000 『ジェンダー秩序』, 東京: 勁草書房。
- Fogel, Ramón 1997 “The Peasantry.” Lambert, Peter & Nickson, Andrew. (eds.) *The Transition to Democracy in Paraguay*, Macmillan Press Ltd., New York, pp.97-105.
- 藤掛洋子 2000 「農村女性のエンパワーメントに関する考察—パラグアイ共和国S村の住民女性が実施した生活改善プロジェクトの事例より—」, 『お茶の水女子大学大学院修士論文』。
- 藤掛洋子 2001 「プロジェクトが住民女性にもたらした質的変化の評価にむけて—パラグアイ共和国S村の住民女性が実施した生活改善プロジェクトの事例より—」, 『日本評価研究』, 第1巻, 第2号, pp.29-44。
- 藤掛洋子 2003 「パラグアイ農村女性の性と生殖に関する意識とその変化—農村女性の家族計画の「語り」と「実践」を手掛かりに (1994年-2001年)—」, 根村直美編 『健康・ジェンダー・セクシュアリティ』, 東京: 明石書店。
- 藤掛洋子編 2003 『人々のエンパワーメントのためのジェンダー統計・指標と評価に関する考察

- 定性的データの活用に向けて —, 国際協力事業団国際協力研究所。
- Fujikake, Yoko 2008 “Qualitative Evaluation: Evaluating People’s Empowerment,” *Japan Evaluation Society* Vol.8, no. 2, pp: 25-37.
- Fujikae, Yoko & Kuroda, Shihoko 2008 “Extraction of an Empowerment Evaluation Model from a case study in Paraguay and its application in Honduras”, Keichi Kumagai et.al. eds., *Beyond the Differences: Repositioning Gender and Development in the Asian and Pacific Context*, Ochanomizu University.
- フーコー, ミシェル (渡辺守章訳) 1986 『性の歴史 I 知への意思』, 東京:新潮社。
- Gutmann, Matthew 1996 *The Meaning Of Macho: Being A Man In Mexico City*, University of California Press.
- 原ひろ子 1999 「規範概念としての『エンパワーメント』と分析概念としての『エンパワーメント』」, 国立婦人教育会館編『女性のエンパワーメントと開発—タイ・ネパール調査から—』, 国立婦人教育会館, pp. 91-108。
- JICA Paraguay 2007 *Análisis de La Situación de Género En El Paraguay*.
- 川嶋瑤子 1999 「言説, 力, セクシュアリティ, 主体の構築」, 『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』, 1999年3月, 第2号19号: 3-23.
- 稲森広明 2000 「パラグアイにおける長期独裁と民主化の諸問題」, 『ラテンアメリカ研究』, 19, pp.1-37。
- 国際協力事業団企画部 1998 『国別WID情報整備調査—パラグアイ—』, 国際協力事業団。
- 箕浦康子 1999 『フィールドワークの技法と実際: マイクロ・エスノグラフィー入門』, ミネルヴァ書房。
- モーザ, キャロライン (久保田賢一・久保田真弓訳) 1996 『ジェンダー・開発・NGO—私たち自身のエンパワーメント—』, 東京: 新評論。
- 太田美帆 2005 『『開発援助とエンパワーメント論』の系譜』, 『アジア研ワールド・トレンド』, 2005年9月号, 第120号: 4-9。
- スコット, ジェーン・W 1992 荻野美穂訳 『ジェンダーと歴史学』, 東京: 平凡社。
- 内山田康編 1999 『ジェンダー—エンパワーメントを考える—』, 財団法人 国際開発高等教育機構国際開発研究センター, pp.1-9.
- MAG (Ministerio de Agricultura y Ganadería) .1991. *Censo Agropecuario Nacional 1991*, MAG, Paraguay.
- Mickelwait, Donald R. et al. 1976 *Women in Rural Development*. Westview Press, Boulder.
- Molyneux, Maxine 1985 “Mobilization without Emancipation? Women’s Interests, State and Revolution in Nicaragua.” *Feminist Studies*. (11) 2, pp.227-254.
- Molyneux, Maxine 2001 *Women’s Movements in International Perspective: Latin America and Beyond* (Institute of Latin American Studies) , St. Martin’s Press, England.
- Ponpa Quiros, Maria del Carmen. 1996. *Valores Tradicionales y Pantas Reproductivas*. FUNAP, Asunción.
- Rowlands, Jo 1997 *Questioning Empowerment – Working with Women in Honduras*, Oxfam Print Unit.
- Stevens, Evelyn. P. 1973 Machismo and marianismo. *Society*, 10 (6) , 57-63. Wood, Martin L.. *The Oxford English Dictionary* 1989 second edition. Oxford, England.
- United Nations Deveopment Programme 1995 *Informe Nacional de Desarrollo Humano desde la Perspectiva de Género*. Naciones Unidas, Paraguay.
- World Bank 2007 *World Development Indicators database* 2007.

(2008年9月6日掲載決定)

## **Empowerment of Rural Women and Changes to Gender Structure**

Case study of the evaluation of the “Improving living Standard Project” in Paraguay

FUJIKAKE Yoko  
(Tokyo Kasei-Gakuin University)

The significance of women’s empowerment has long been debated within development studies, gender and development (GAD) theory, and wherever development is practiced. However, there are several critiques of “Empowerment”.

In this paper the author will illustrate qualitative changes regarded as a process of empowerment in a target population. The Empowerment Evaluation Model: Three Types of Achieved Results (the Fujikake Model), based on work completed in the Improving Living Standards Project and undertaken autonomously by rural women in Paraguay’s Village S (Fujikake 2001), will be used as a framework with further data obtained from the 2001-06 research. Throughout this process, changes to gender relationships, including men and the social structure within the target society, are analyzed and the existence of realignment in gender structure as a result of women’s empowerment in the target area is concurrently examined. The model is elaborated with this process.

The process of empowerment of rural women who autonomously undertook the Improving Living Standards Project is positively altering social relationships not only at the microcosmic level, such as the household, but also in the village community with changes to gender norms and social structure.

There is considerable resistance that some researcher point out the word ‘empowerment’ is one of the discourse, however at the local level the author believes there exists empowerment phenomena because the community in which the women are embedded is not isolated from other communities and these women are restructuring their consciousness in daily practice. To analyze the empowerment phenomena multiple perspectives including time, space and history, is needed. Empowerment brings about qualitative changes, which are difficult to evaluate and a framework is needed. The Fujikake Model can be a tool to aid in visualizing empowerment.

**Key words:** rural women, empowerment, gender structure, social change, qualitative evaluation